

研究論文

ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、 ヘレン・ミアーズの日本人論・日本文化論を総括する

Benedict's, Gorer's and Mears' view of Japan and its people

福井七子
FUKUI Nanako

The purpose of this report is twofold: to retrace of my 20 years research on the works of Ruth Benedict, Geoffrey Gorer and Helen Mears; and to show the importance and the impact on the Office of War Information and the influence they had on the U.S. propaganda regarding Japan which implicitly became the basis of American strategy during World War II.

Key words

ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、ヘレン・ミアーズ
日本人論、日本文化論、プロパガンダ

はじめに

『菊と刀』という書名を言っても、すぐにピンとくる人は少なくなり、ましてルース・ベネディクトという名前など聞いたこともない人も多くなっているのが日本の現状かもしれない。しかし、日本文化論に興味を持つ人にとって『菊と刀』はもはや古典書のような存在であり、日本文化研究は『菊と刀』ぬきには考えられないほど重要な意味を持っている。

中国では1990年代には十数種類の翻訳書が出され、いうならばひとつのブームを形成している。しかし、中国語に訳されたものは、原著が参照されているものもあるが、ほとんどが1948年の長谷川松治による日本語訳を参考にしており、その上、原文を無視して、付け加えたり、省略されたりした箇所も多く、問題点があると言わざるを得ない。たとえば、すべての訳本では acknowledgements が省かれていたり、原著とはまったく関係がない写真や浮世絵などが勝手に挿入されたりしている。いずれ、中国語訳の問題点についてはきちんと精査されねばならないだろう。

本論文は筆者がこれまで行ってきた日本文化論・日本人論の研究を総括し、また最近の資料

調査から得たあらたな視点を加えエスノグラフィー的な面から書き残しておきたいという趣旨からまとめたものである。将来のことはもちろんわからないが、『関西大学外国語学部紀要』として書くのは、おそらくこれが最後になると思われるからである。

I ルース・ベネディクト研究について

私の日本文化論研究はルース・ベネディクトに始まった。メンフィス州立大学で女性史を教えているマーガレット・カフリーが *Stranger in this land* を1989年に著し、(Caffrey: 1989) それを翻訳したのがきっかけであった。この書はルース・ベネディクトの生涯をメイ・フラワー号でアメリカに渡ってきた祖先にまで遡り、その歴史の流れとともに、家庭環境や当時の時代背景などを紹介することで、彼女の人格形成やひととなりを詳細に著したものであった。400ページにも及ぶ著書であったが、約10ヶ月で翻訳を終えた。学ぶところも多く、ベネディクトについてまだ明らかにされていない部分も書かれ、実り多い仕事であった。しかし、人物史を書く場合、往々にしてありがちなことだが、前半の家族史に大半のページが費やされ、後半、つまり私が興味をもっていた戦時中の戦時情報局 OWI (Office of War Information) における日本人研究、および戦後の名著である『菊と刀——日本文化の型』についてはごくわずかししか触れられていなかった。そのためその間の資料収集にとりかからねばならなかったわけである。

Stranger in this land は『さまよえる人 ルースベネディクト』として関西大学出版部から出版されることになった。(カフリー: 1993) 初版で2000部出し、すぐに完売となった。

この翻訳書は当時話題となり、『朝日新聞』の日曜版の書評欄に取り上げられただけでなく、その他『読売新聞』や『産経新聞』でも紹介された。本論は学術的な論文であり、メディアの影響について書くことも許されると思われるので、その顛末について少し述べておきたい。『産経新聞』に掲載された後しばらくして、ある種の政治団体から巻紙にしたためた質問状を受け取った。一つは姫路の団体、そして二つは奈良の団体からであった。彼らは『菊と刀』というタイトルには敏感に反応する。それはそのタイトルから天皇家との関連をイメージするのかもしれない。その後、私はひそかに個人研究室の荷物をまとめ、そうした政治団体の街宣車がやってくるような場合には、速やかに学校を辞すべく準備をした。同時に、このまま辞するというのはあまりに理不尽で、私の研究者としての機会も失われるという考えから、それまで行ってきたベネディクト研究を英文にまとめ、当時の文学部の紀要に提出した。(『文學論集』第44巻第1号～4号1995年3月)そして、ベネディクト・コレクションのあるヴァッサー大学だけでなく、いくつかの研究機関にも送った。それが功を奏してか、様々なところでの発表の機会に恵まれた。アメリカのネブラスカ大学で行われた「ルース・ベネディクトの『菊と刀』生誕50周年記念学会」にも招待され、発表することができた。英語で出版することで、より多くの人の目に触れることを実感することができた。幸い、その後は何の干渉もされることなく、万

事スムーズに事を運ぶことができるようになったことだけは付け加えておきたい。

翻訳本の出版の後、機会を得てアメリカのメンフィスまで著者であるカフリー女史を訪ね、翻訳本を手渡すことができた。カフリー女史は日本語は理解できないが、翻訳過程でいつも私を悩まし、気がかりであったことについて彼女に質問したいとかねてより思っており、また聞いて置かねばならないと考えていた。カフリー女史は、とても美しく、穏やかで、物腰も実にソフトな女性であった。飛行場まで迎えに来てくれたのだが、彼女について何の情報も持たなかったにもかかわらず、ひと目でカフリー女史だとわかった。何かベネディクトの若い頃の写真を思い出させた。彼女は車中、「何か見たいところはありますか」とたずねた。メンフィスはエルビス・プレスリーの生誕地であったため、そこに行きたいと答えた。と同時に、彼女は私を自分の家には連れていかないのだ、と思った。翻訳過程で常に私を悩ませていたことについて、ちょっと質問させていただいてもいいですか、と尋ねてみた。彼女は何でもどうぞ、と答えてくれた。私の疑問は一つであった。それはカフリーの論文の書き方に顕著に表れていたマーガレット・ミードについての彼女のスタンスの問題であった。「カフリーさんはマーガレット・ミードがお嫌いですか」とたずねた。運転をしていた彼女の顔つきが急に変わった。そして私に言った言葉は今も忘れることができない。「あなたは私のすべてをお見通しのようですね。」と言った。そして彼女はマーガレット・ミードについて自分の見解を述べてくれた。それは、マーガレット・ミードとルース・ベネディクトが親密な関係にあったことに関連するものだが、簡単にいうと、カフリー女史はマーガレット・ミードがルース・ベネディクトを manipulate しているように感じたのだと答えた。私は彼女のマーガレット・ミードに関するとなえ方を聞き、納得することができた。しかし、私の考えは必ずしもカフリー女史と一致するものではなかった。カフリー女史は安心したためか、私を自宅に連れて行ってくれた。おいしいお茶とクッキーを彼女のパートナーである女性とともにいただいた。自分の翻訳が正しいトラックを走っていたことを確信することができ、はるばるメンフィスまで来てよかったと感じさせる、とても有意義な旅となった。

I-1 ベネディクト・コレクションでの資料収集について

I-1-1 『菊と刀』に関する資料

ベネディクト・コレクションは彼女が卒業した大学ヴァッサー・カレッジに厳重に保管されている。資料は膨大にあり、どれほど続けねばならないのか見当もつかないまま、ひたすら読みふけた。当時はメモリースティックなどなく、一回目の調査で紙媒体で約40キロの資料を持ち帰った。単調な資料調査の折に、思わぬ発見をしたことも思い出となっている。そのなかには、思い出してもわくわくするような資料も入っていた。ファイルのなかに、ドナルド・キーンからベネディクトに宛てた手紙を見た時は思わず声を出してしまった。図書館長は、どうしたのかと聞いてきたので、とんでもない手紙を見つけたと答えた。その手紙は、ベネディク

トが『菊と刀』を出版し、その内容にいたく感動したという内容であった。(Ruth Fulton Benedict Collection 以下 RFB とする RFB 1) 館長の返答は「まあ、よかったね。でもそれ、誰なの?」という実に素っ気ないものであった。もし彼女がドナルド・キーンについて知っていたなら、おそらくコピーは許されなかったかもしれない。

一回の調査では不十分であることが判明し、さらに2回ヴァッサー大学にでかけることになってしまった。資料収集の時に得た大切な教訓は、少しでも心にひっかかった資料は必ずコピーをしておくということであった。ベネディクト・コレクションには『菊と刀』の原稿段階の資料も含まれていた。ページ数も多く、コピーするべきかどうか迷ったが、とにかく複写しておくことに決めた。これが後の研究で重要なものとなることなど予想だにしていなかった。

コレクションでの資料のなかで重要視したのは、ベネディクトと出版社とのやりとり、そしてベネディクトの私信などであった。出版社とのやりとりのなかで興味深い手紙と電報をみつけた。それはタイトルに関するものであった。タイトルが何回も変わっているのである。ベネディクトが最初に考えていたタイトルは“*We and the Japanese*”であったが、原稿を書いていくうちに“*Japanese Character*”に改めたいと考えるようになった。しかしI章を読んだ段階で出版社は、第I章につかえられた“*Assignment: Japan*”が適当なのではないかと進言した。(RFB 2)

一度は同意をしたが、ベネディクトは“*Patterns of Culture: Japan*”にしてほしいと書き送る。(RFB 2) それは、ベネディクトの初期の代表作である *Patterns of Culture* (『文化の型』) を読者に想起させ、興味を抱かせるのではないかと考えたことによるものであった。しかし、出版社がどうしても“*Assignment: Japan*”を推すならば固執はしないが、その場合は“*Assignment: The Japanese*”にしてくれるように希望する。それはベネディクト自身の言葉を借りれば、‘*sacred Japanese land*’、つまり日本の土地を訪れたことがないという理由からであった。(RFB 3) やがて出版社は“*Patterns of Japanese Culture*”を提案する。(RFB 4) やっとタイトルがそれに決定するかと思えた時、新しく三つのタイトルが出版社の編集会議で急遽浮上する。“*The Curving Blade*”と“*The Porcelain Rod*”そして“*The Lotus and the Sword*”であった。なかでも出版社は“*The Lotus and the Sword*”を強く勧める。(RFB 5)

結局、ベネディクトは“*The Lotus and the Sword*”を選ぶのだが、「蓮」を「菊」に変えることを希望する。(RFB 6) その結果、彼女は最終原稿に手を入れて、「菊」と「刀」に関する箇所を付け加えたのである。そしてさらに興味深いのは、イギリスの社会学者であるジェフリー・ゴラーに手紙でそのことを知らせていることであった。(RFB 6)

「来月の半ば頃に本が出版されますから、2～3週間のうちにお送りさせていただきます。その本のタイトル『菊と刀 日本文化の型』にまつわる話はお聞きになりましたか。マーガレットは私が出版社に振り回されていると言っています。全くその通りです。お気に召せば幸いです。保証の限りではありません。」という内容だった。

ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、ヘレン・ミアーズの日本人論・日本文化論を総括する（福井）

なぜゴラーにこのような手紙を書く必要があったのか。ゴラー研究の必要を感じたのはその時点であった。実際、ゴラーの影響を感じさせる部分が、『菊と刀』の12章「子どもは学ぶ」に顕著にみられる。12章では、子育てから子どものしつけの様子、そして日本の家屋の構造とそれに関する細やかな配慮やしきたりに至るまで、ゴラーの論文が大胆に引用されているのである。

『菊と刀 日本文化の型』というタイトルが編集社の意向により決定したことを学会で発表できたことは、私にとってベネディクト研究にはずみをつけることとなった。ベネディクトが「菊」と「刀」にイメージしたことは何だったのかも含めて研究をすすめ、研究を一步前進させることができたのではないかと思う。

I-1-2 報告書 Japanese Behavior Patterns

資料調査の折に手に入れていた、戦時情報局での研究成果の一つで、『菊と刀』の原型ともいべき報告書 Japanese Behavior Patterns を翻訳した。No.25の番号がつけられたこの報告書は、ベネディクトが戦時情報局で研究をしていた時に書き、国務省に提出されたものであった。（RFB 7）ベネディクトの日本人論を決定づけるものであり、その当時の日本人論とは全く趣きを異にするものであった。

ベネディクトの報告書の分析をする前に、戦時情報局（Office of War Information：OWI）について、その設立の経緯、組織、そしてその任務を含んで、どのような人が関わっていたのかの説明をしておかねばならないだろう。戦時情報局は1942年6月13日に大統領令9182のもとに設立された組織で、Office of Facts and Figures（情報局）とDivision of Information of the Office of Emergency Management（危機管理情報部署）、Office of Government Reports（政府広報局）そしてForeign Information Service（対外情報局）の人材や組織的な任務を引き継いだものであった。しかしまた、海外のニュースやレポート、そして国内外のプロパガンダを分析するという新しい任務も負っていた。CBS Newsのエルマー・デイヴィス（Elmer Davis）が戦時情報局のディレクターに任命された。彼はこの地位を使ってアメリカのトップの学者たちの何人かをこの機関に雇い入れた。戦時移民局（War Relocation Authority）が社会学的調査局（Bureau of Sociological Research）がポストン（Poston）でのリサーチの役割を引き継いだ後、アレキサンダー・レイトン（Alexander Leighton）は、ワシントンDCにおける戦時情報局の海外戦意分析課（Foreign Morale Analysis Division：FMAD）のディレクターになった。

戦時情報局は非常に多彩な学者集団を集めた。ポール・ラインバーガー（Paul Linebarger）は政治学者で、ジョンズ・ホプキンス大学で訓練を受け、心理戦のスペシャリストであった。彼は文化を操作する以前に、まず文化を理解する必要が重要だと考えていた。そしてラインバーガーは戦時情報局の極東部門の副長官としてジョージ・テイラーを登用した。

戦時情報局の海外戦意分析課において、さまざまなアメリカの軍事攻撃に対して起こりうる影響を分析し、プロパガンダを作成しながら、文化人類学者たちは日本人の国民性や日本人論に関する理論を発展させた。「日本人とは一体誰なのか。アメリカは日本本土を攻撃するべきか」などの答えを求めた。テイラーはこうした問題は、基本的に心理学的ではなく、文化的な問題であると認識していたため、日本の軍人や一般市民の戦意を研究し、うまく操作するために文化人類学者たちを戦時情報局に登用した。そのなかには、ルース・ベネディクト、ジョン・エンブリー、モーリス・オブラーなどおよそ30人の社会学者を雇用したのである。(Price:2008:171-172)

そしてベネディクトは日本班のチーフとなり、さまざまなレポートを書いていった。そうした日本研究をまとめたもののひとつがレポート25、*Japanese Behavior Patterns*であった。

I章から5章で成り立った数十ページのものであるが、その章立てこそが彼女の才能を雄弁に語る内容であった。I章「日本人は宿命論者か」、II「日本人の責務体系」、III章「日本人の自己鍛錬」、IV章「誠実」、そしてV章の「危険な綱渡り」の5章で構成されている。

I章の「日本人は宿命論者か」では、日本人の死に対する姿勢が書かれ、戦時下における日本兵にみられる死をも恐れぬ特攻、玉砕、そうした行動ゆえに欧米人は日本人が死を宿命として従順に受け入れるという解釈に真っ向から反対する。欧米人は死の瞬間が訪れるまでは自分の意思の沿わせようとするが、死ぬということに対しては従順である。それをベネディクトは日本語と英語の慣用句である「To die a dog's death」という言葉を例に使う。日本語にも英語にも存在する言葉であり、どちらも「犬死にする」ということであるが、その含意はまったく違うものであると説明する。

アメリカ人も日本人も「犬死にする」という言い回しをもちいるが、アメリカでは、どん底の生活のなかで惨めに死んでいくことを意味する。それに対し日本のばあい、この言葉は「死ぬことによって何かを成し遂げるわけでもなく、ただ犬のように死ぬこと」を指している。人はい義ある死に方をすべきだ、というわけである。(『日本人の行動パターン』:27)

『日本人の行動パターン』の構成は、ベネディクトの文学的センスがあますところなく発揮された書き方となっており、一連の物語りを読むように、読み手にじわりと、しかしボディ・ブローのような効果を持って迫る。I章「日本人は宿命論者か」から始まり、II章では日本人の責務体系をチャートとして説明することで、日本人が最も敏感に感じる「責務」に内包される「恩」「義理」「義務」を中心に説明する。そして、日本文化における「恥」の概念を西洋の「罪」のそれと比較することで、「恥」の背後にある「恩」と「義務」の関係を明らかにする。

さらにIII章では「日本人の自己鍛錬」の持つ意味、「無我」「無心」「一点集中」の心に到達す

る目的とIV章の「誠」との関係を明確にし、「誠」のある人は利己的ではなく、感情に走ることはない、と論理的に解説する。それは日本人の自己鍛錬の観念と目的を表わしているのである。さらに日本人にとって重要な倫理規範である「誠実」、つまり「誠」の心の重要さがいかなる意味を持つのかを分析する。日本では相手から「誠」の心が感じられない時、たとえば嘲笑されることなどに対しては、いかなる犠牲をもってしても「報復」にでるのが彼らに課せられた「面目を保ち」「汚名を注ぐ」方法である、と説明する、この「報復」については次に続く結論、「危うい綱渡り」によって、日本人の責務や倫理観が論理的な説得をもつのである。言い換えれば、相手から「誠」の心を感じることができれば、相手を受け入れるが、「誠の心を欠く」と感じた場合には怒れる「浪人」の国となるのである。

ベネディクトによって繰り返して用いられる‘We’と‘Japanese’の書き方は、思わぬ効果を与え、いつの間にか読み手に対して、一体どちらが不可思議な国民なのかという感覚に陥らせるのである。

I-1-2-1 日本人の倫理規範、責務体系

ベネディクトは、日本人の「名誉と恥辱」、「義理と人情」、「責務」つまり obligation の概念について、日本と西洋の文化的な相違について書いている。恩の貸借関係が生じると、受けた恩には必然的に返さなければならない義務と義理が発生することに注目したのである。これは日本人の責務体系の根幹をなす部分である。ベネディクトは「恩」の概念を次のように説明する。「…日本人はこれを“オン”(恩)と呼んでおり、英語では‘obligation’(責務)から‘kindness’(親切)‘love’(愛)にいたるまで、さまざまな言葉に訳されるが、実際には『責務の重荷』『負い目』といった意味でしか使われていない。『恩を受ける』といえば『負うところがある』こと、『恩を与える』といえば『人に責務を負わせる』ことを指す。…日本人の言い方によると、誰もが『恩に着る』のであり、日本国民として生まれて子どものころに親に面倒を見てもらった以上、また特に、生涯を通じて世間並みではあっても人づき合いをしてきた以上、それは避けがたい。」日本人が感じる非常に強い拘束力を持つ‘義理’について、ベネディクトは特に力点を置いて説明する。

日本人の倫理観の根幹となすのは、義理を果たすことであり、それは名誉や面目に関わることである。「恥を知ること」はしたがって、日本人の徳のなかでも、もっとも重要で気高いことであり、日本人は名誉や面目のために義理を果たすが、恥辱を受けた場合はそれを晴らさなければならない。受けた侮辱や恥は、どのように時間がかかろうとも、必ず清算しなければならない。日本では貸し借りの清算をするというのが、道徳体系の基盤となっていると説明する。日本人は「恩」を受けるとそれを必ず返済しなければならないと感じる負債の気持ち、それをしない限りいつまでもその人物との関係を清算することができないという責務の強さを日本人は感じ続けなければならない。その強さを様々な例を挙げながらベネディクトは説明している。日本人が何より感じ入るのは相手から「誠の心」であると書く。それは最終章の「危険な綱渡

り」へと一直線につながっていくのである。つまり「危険な綱渡り」とは連合国、特にアメリカ側の占領政策に関わるものであり、日本人のこうした精神構造を理解しない占領政策は、アメリカを後々まで危険な立場に追い込むことにつながりかねないことを指摘するものであった。タイトロープを渡るのは他ならぬアメリカなのである。

Japanese Behavior Patterns は『日本人の行動パターン』としてNHK ブックスから出版され、現在6刷りである。この本でも書き、またNHKの「視点論点」でも話したことであり、カフリー女史も指摘し、後にマーガレット・ミードの娘によって書かれた『娘の眼から』(ベイトソン:1993)でも述べられていたように、ベネディクトはヘテロセクシュアルではなかったと考えられていた。しかし、私は今では若干異なった考えに立ち至っている。そのことの詳細については、現在翻訳中の *Anthropologist at Work* 「人類学者の仕事」(仮題)のなかで説明したいと思っている。フェミニズムの観点から研究されることも多いベネディクトの重要な側面だと考えている。

II-1 太平洋問題調査会 (Institute of Pacific Relations 以下 IPR とする)

ニューヨーク会議

ベネディクトが報告書「日本人の行動パターン」を書くにあたって大いに参考となった会議は、太平洋問題調査会が1944年12月16, 17日にニューヨークで開かれた太平洋問題調査会であった。

対日戦の遂行や日本に対する戦後政策を巡って、「日本人の性格構造」を分析するための臨時会議だった。(RFB:8) 1944年の太平洋問題調査会に出席した顔ぶれは、日本に関する現在および将来の計画に従事する政府の専門家、日本および日本人についての学識経験者、そして文化とパーソナリティーの研究者を含む精神分析学者や文化人類学者、社会学者など40人を超す研究者で構成されていた。日本人についての関連研究は行なってはいないが、文化とパーソナリティーに関する諸問題について、システムチックな方法論で行ったり、日本人の性格について新しい識見を持っている人たちが参加した。タルコット・パーソンズ (社会学者)、アレキサンダー・レイトン (社会学者、精神科医で、戦時情報局でベネディクトらとともに日本人の戦意分析に関わり、日本研究チームを率いた)、ローレンス・キュービー (精神分析学者)、アイヴィス・ヘンドリクス (精神分析学者)、アーンスト・クリス (精神分析学者)、マーガレット・ミード (文化人類学者)、ルース・ベネディクト (文化人類学者)、ジェフリー・ゴラー (社会学者)、ヘレン・ミアーズ (ジャーナリスト)、ダグラス・ハーリング (人類学者、シラキュース大学の教授で、戦前には宣教師として日本に長期滞在した経験を持つ)、ゴードン・ボールズ (人類学者)、C. イーグルハート (極東問題専門家)、ジョン・マキ (大戦末期に『日本軍国主義——その原因と治療法』を出版し、戦後は日本の占領にも関与)、バートラム・レヴィン (精神分析学者)、ハリー・オーバーストリート (教育学者)、トーマス・フレンチ (精神

ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、ヘレン・ミアーズの日本人論・日本文化論を総括する（福井）

分析学者)、ドロシー・ボーグ(米国 IPR の事務局に勤め、1973 年にはオカモト・シュンペイとともにコロンビア大学出版から Pearl Harbor As History: Japanese-American Relations, 1941 を編集出版している)、フランク・タナンボーム(太平問題調査会国際事務局長)などが主たるメンバーであった。

本論文でとりあげたルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラーそしてヘレン・ミアーズの三人がそろって顔を合わせたのは、おそらくこの会議だけだったのではないだろうか。

II-1-1 日本人の性格構造に関する議論

会議に先立って、社会学者であるタルコット・パーソンズによる「日本の文化パターン」と「日本社会構造の概観」と題する講演が行なわれた。加えて、日本人兵士が書いた日記が回覧され、映画『チョコレートと兵隊』が上演された。「この映画のプリントのひとつが、太平洋戦争の初期にアメリカ人の手に渡り、社会学者や、戦争心理を専門にする学者の研究のために字幕をつけて上映された。(今日、このプリントが現存する唯一のもので、今もアメリカに保管されている)」(ハイ：1995：172)

そしてのちの太平洋戦争中、アメリカ国務省が編成した対日宣伝プロジェクト・チームによって、日本人の国民性研究の最も適当なテキストと考えられ、英語字幕を入れて研究試写に使われたのである。

ベネディクトも日本人研究の方法のひとつとして映画を用いており、IPR の出席者としてこの『チョコレートと兵隊』を見た。そしてアメリカと日本の戦争映画を通しての戦意高揚に対するスタンスの違いに、日本人の責務体系、日本人の自己鍛錬の背景にある価値規範を感じるのである。

アメリカの教義との違いは、日本の映画のなかに明確に示されている。日本で作られる愛国的な戦争映画は、日露戦争ものも日中戦争ものも、かりにそれがアメリカ映画であったとしたら、平和主義のプロパガンダと受け取られかねない。ぬかるみのなかの行進という単調な日課、無意味な戦闘での苦しみ、中途半端な作戦といったものが、前面に押し出されているからである。ところが日本では、こうした映画は平和主義を訴えるものではなく、軍国主義のプロパガンダなのである。映画が提供するさまざまな美徳と気高さのパターンによって強調されるのは、人生における苦しさや不幸。挫折などである。最後のシーンは、勝利でもなければ、必死の集団突撃ですらない。映し出されるのは、これといった特徴のない中国の町で泥にまみれたままひと晩の休息をとっているところや、身体が不自由な者、失明した者といった、日本の家族の三世を象徴する三つの戦争の生存者たちである。欧米諸国では、感動的な勝利を背景にした「劇的な」映画が製作されているのに加え、戦争による犠牲をテーマにした映

画も作られており、そこでは犠牲者たちが全快していく過程が描かれる。しかし、自国の戦争映画を見る日本人は、'恩'が返され、そのために個人の欲望と慰めを断念することが当然のように求められれば、それで満足する。戦争の気高い目的すら、ふれられることはない。(『日本人の行動パターン』;87)

外国に対する宣伝、とりわけ日本人の戦意高揚を示すにはあまり効果的であるとは思えないような『チョコレートと兵隊』がニューヨーク会議では用いられたのだが、ベネディクトにとってはこの戦争映画の非戦闘性は非常な驚きであった。会議の初日は主として精神分析学者や社会学者そして政治学者が指導的な役割を果たした。パーソンズやハーリング、マキの発言が目立つが、2日にわたって行なわれた会議を通してもっとも発言の回数が多かったのはジェフリー・ゴラーであった。ベネディクトも発言はしたものの、会議の進行に影響を直接与えるようなものではなかった。それはゴラーとは対照的であった。

この会議で提案された特筆すべき新しい考えは、日本人の行動とアメリカ社会における青年期にみられる特徴的な行動との比較であった。それは主として精神分析学者によって指摘されたことであるが、日本人は「死のみならずあらゆる点において未成熟なのです。日本人は、私たちが青年期の未熟さとよぶに相応しい性質を持っているようです。ころころ変化する態度、人に応じて異なる感情表現、幻想に陥ることなどはパーソナリティー形成が成熟していないことを表わすものです。日本人の子どもは、7歳まで愛情いっぱい育てられますが、その後突然、義務や責任を厳しく課せられます」という意見に代表されるものであった。

また日本人の行動と集団生活とのかわりを述べた社会学者、タルコット・パーソンズの所見は重要なものといえよう。「日本ではグループの結束構造は、そこに属する個人を守るどころか、その人を非難的にします。こうした構造にみられる極めて強圧的な状況は、個人に多大な影響を及ぼすこととなります。比較的単純な農村社会ではあまり競争は考えられません。西洋社会では、個人はその人自身の能力という点から認められねばなりません。日本社会で求められることは、個人の完璧な達成度なのです。その人はいかなる犠牲を払っても、成功しなければならないと考えます。自分が属するグループの結束を破ることなく自分が果たす個人的行為や活躍は、一段と重要になります。」実は、この点については、ゴラーが書いた論文 *Japanese Character Structure and Propaganda* (Geoffrey Gorer Collection 以下 GC とする。GC 1) のなかで「日本人にとって他からの賛同がどれほど重要であるか」として指摘していたことであった。

日本人の行動の背景にある「身内とよそ者」の考え方と、日本人にとって「敗北」が意味することをジョン・マキは説明する。「日本では身内とよそ者という考えは非常に重要です。西洋人は、日本人が非常に礼儀正しいと考えています。確かに身内の関係のなかではきちんと紹介もされ、礼儀正しくふるまわれもします。しかし、よそ者の状況の場合、丁寧さは完全に無視され、人間の感情を欠いた関係となるのです。…日本人は敗北した敵は、軽蔑をもって処遇さ

れるべきだと思っています。』

さらに敗北の影響について話し合われた後、アメリカが日本に対して取るべき具体的な方法が提案される。それは日本人を扱うときの方法として儒教的な兄—弟という関係を用いることであった。そうすることで今の戦争を家族のなかで起こった喧嘩としてとらえ、アメリカ側の強硬さも正当化することができるというものであった。この考え方に対してはハーリングも精神分析学者フレンチも支持するが、同時にその難しさも指摘される。というのはアメリカが「兄」としての役割を果たすためには大きな障害があったからである。それは、これまでアメリカが行なってきたプロパガンダに起因するものであった。アメリカは国内に向けて日本人を「猿人間」に代表されるように人間以下と扱うプロパガンダを強烈に行なってきたのである。そのためアメリカの世論では、日本人は人間以下とみなされており、日本とアメリカがいまさら、親しい関係となることなど到底無理なことであった。ゴラーの考えは、「私たちが日本人を弟と思わない限り、私たちが兄と思えなどと日本人に求めることはできませんよ」というものであった。

なぜゴラーがこの会議で指導的な役割を担うことができたのかは、この会議が開催される以前に、ゴラーがすでに日本人研究をしており、論文を書いていたからにほかならない。ここでジェフリー・ゴラーの日本人の国民性研究について若干の考察を試みたい。

Ⅲ ジェフリー・ゴラーの研究について

ジェフリー・ゴラーの著書は、日本では翻訳されたものが3冊出版されている。イギリスでは社会人類学という名称を使うことが多いため、ゴラーも文化人類学者というより社会学者と紹介されることが多い。ゴラーの著書としては『死と悲しみの社会学』（*Death, Grief and Mourning in Contemporary Britain*, 1965, 訳書 1986年初版、ヨルダン社）から出版されたものがあり、その「自伝的序文」には彼自身の経歴やどのようなバックグラウンドを背景にして育ったのかといったことを垣間見ることができる。また彼自身が経験した身近な死に関する影響の経験を契機に著したのがこの本であった。その他の2冊は1966年に翻訳出版された『マルキ・ド・サド—その生涯と思想』（*The Life and Ideas of the Marquis De Sade*, 1953, 訳書1966年初版、荒地出版社）そして1967年に出された『アメリカ人の性格』（*The Americans—A Study in National Character*, 1948）がある。それ以前の1935年に出版されたのが *Africa Dances*（First published by Faber and Faber, 1935）である。この本は後のゴラーの人生に大きな影響を及ぼすことになったのだが、「あとがき」にも書かれているように、*Africa Dances* 「アフリカは踊る」（仮題）の出版は多くの著名な人類学者の関心を集めるものとなった。彼が1934年にコート・ジボワールの赤道付近の森に住むゴロ族を訪れ、その村に滞在した経験をもとに書かれたものであった。

しかし、これらは日本研究とは全く関係がないものであり、彼を日本文化・日本人論の研究者として正面からとらえた本は日本では皆無であった。というより欧米においても日本研究者としてゴーラーを取り上げた本はないと思われる。そのため、全く資料のない状態から研究を始めなければならなかった。とはいっても、ベネディクト・コレクションにはなかったが、エール大学の図書館には彼の日本人の性格構造に関する論文が残されていた。彼はアメリカに来て、身を置いていたのはエール大学の研究所であった。2010年の『外国語学部紀要』ですでに述べたことだが、ジェフリー・ゴーラーがイギリスからアメリカにやってきて、文化人類学者マーガレット・ミードにコンタクトをとったのは1935年12月8日であった。ミードはその頃、自然史博物館に勤務していた。この日以来、ゴーラーはミードとベネディクトから文化人類学のイロハを学んだのである。ゴーラーが渡米した頃のアメリカの文化人類学界は、フランツ・ポアズやベネディクトらが中心となって活躍していた。またエール大学ではジョン・ドラードから心理学の知識を得ることで、キャリアを確立していった。

アメリカで日本人研究が集中的に行なわれるようになったのは、1942年末から1944年にかけてであった。しかし、ゴーラーは1941年12月31日付けのマーガレット・ミードに宛てた手紙のなかで、日本関係の文献使用に関して、また日本の須恵村でフィールドワークをしたジョン・エンブリーと母親による子どものしつけについて長時間話し合ったことなどについて書いている。またシラキュース大学教授で日本に長年滞在していたハーリングとも話し合ったことも述べている。(GC 2) つまり、ゴーラーの日本人に関する研究は、戦時情報局における本格的な日本研究に先んじるものであったと言えよう。

ゴーラー・コレクションはイギリスのサセックス大学に保管されている。一回目の資料調査ではさしたる成果を得られなかった。彼についてのアウトラインが少し掘めた程度であったが、コレクションの館長と偶然にお会いすることができた。彼女はゴーラーからお茶にさそわれた経験を持っていた。そのときの様子を聞くことができたのは幸運だった。彼女によれば、広大な敷地に建てられたマンションに、お手伝いの人はいたそうだが、その屋敷に一人で住み、風変わりな人であったようだ。

サセックス大学の資料に関しては直接の複写は許されておらず、すべてイメージでコンピューターに撮りこむか、資料をパソコンに打ち出すかであった。一度目の資料調査ではもっぱら資料に目を通し、パソコンに打ち出すのに終始した。大まかではあったが、どの程度の資料があるのか、また彼の写真も手に入れることができた。しかし、日本に帰って彼の作品や論文を読んでいくにしたがって、彼がなぜ日本人研究を始めることになったのか、そのきっかけと日本研究のプロセスについてはさっぱりわからなかった。なにより不思議だったのは、彼の日本人研究の最初の論文である *Japanese Character Structure and Propaganda* は、謄写版印刷のものが現存しているが、アメリカで手に入れた資料と、サセックス大学に保管されているものが違っていたからであった。

Ⅲ-1 「日本人の性格構造とプロパガンダ」

Ⅲ-1-1 日本人研究のきっかけとなった資料

ゴラーが日本人研究を始めるきっかけとなったのは、*New Haven Register* の一面に掲載された新聞記事であったことは間違いなさだろう。（GC 3）この新聞の存在を発見したのは、サセックス大学での二度目の調査のときであった。一回目の調査では漠然としたイメージしか掴めなかったが、二度目に出かけた折には、彼が日本研究を始めるきっかけがあったに違いない、それを見つけないといけないという思いで出かけた。背水の陣であっただけに新聞を見つけたときはほっとしたのと同時に、これでゴラー研究が進められるという思いが強かった。

New Haven Register のフロントページを飾った記事は、当時横浜共立学園の校長であったクララ・ルミスが語った40年余に及ぶ日本滞在から得た日本人に関するもので、その日付は1941年11月23日であった。ミードに書き送った手紙から明らかのように、ゴラーが日本研究を開始したのは1941年12月である。このことから考えてもこの新聞が契機となり、ゴラーはルミスをインフォーマントの一人として日本人に関する調査を始めたことは間違いなさだろう。

ゴラーにとってルミスが語る日本人像は、日本人の心理を知る上で多くの示唆的な内容を含むものであった。記事の詳細は『外国語学部紀要』第2号に詳しいので省略するが、彼女の指摘したポイントは、アメリカ人が考えていた「不可解な日本人」を説明するために重要であった。第一として、「真実に対する日本人の態度」のわかりにくさ、そして第二に「日本人の誠実さ」、そして第三のポイント、「日本人は子ども時代から自分の感情をコントロールするように教えられていること」は、ゴラーにとって特に注目すべき内容であった。ゴラーはルミスが指摘したポイントを基にして、欧米と比較することによってこうした心理的な相違を生み出したものはどこに起因するのかを分析するとともに、その所以を子ども時代におけるしつけなどに焦点を置いて調査したのである。ゴラーがインフォーマントとしたのはルミスだけでなく、複数の日本滞在経験者からも聞き取り調査をしている。ゴラー・コレクションに聞き取り調査の資料としてのこされている「子どものしつけに関するメモ」は、ルミスとメッサー夫人（彼女の夫は日本で20年以上もビジネスをしており、横浜近郊に長く居住していた女性）から得た資料が中心であった。

ゴラーが特に注目して調査・分析したのは、日本人の「癩癩」と「性差」「階級差」そして「トイレット・トレーニング」であった。「癩癩」を起こす所以、早期の「トイレット・トレーニング」による影響、そしてその背後にあるしつけの厳しさなどが日本人の性格形成、とりわけ攻撃性などに影響を与えるのではないかという仮説のもとに心理学を用いて分析した。

ゴラーは日本人にみられる性差の明確なる区別に注目し、とくに男性のサディスティックな攻撃心には関心をもって分析している。この分析のため、ハーリングやエンブリーなどとの話し合いのほか、もう一人のインフォーマントである政治学者からも情報を得ている。そのイ

インフォーマントは、日本人の男性にみる穏やかで、何気ない表情と、その下に潜むだらしなく、いい加減な性格の際立った対照を強調して述べている。日本人は格式ばった公の顔と、めそめそした酔っ払いという二つの相反する顔について詳細に語っている。飲むことで鬱憤を晴らすということが日常的に行なわれているのは中流階級やそれ以上の人たちであることも報告している。しかし、酒をのむことで攻撃性が呼び覚まされることはなく、まわりの人たちは、酔っ払っているということでその人間を甘やかし、許してしまう。ゴラーはそのインフォーマントからの情報を参考にしたものを、「日本人の性格構造」の2の「学校時代」のなかで書いている。このインフォーマントが誰なのか、後の学会発表の折でも質問を受けたが、その人物は今日ではある意味で神格化された学者であることやプライバシーの点から考えて、明らかにすることは差し控えておくべきと考える。

ゴラーは、男性と女性という役割の相違のみならず、男性の強迫観念という要素も加えたのである。男同士が集まってくつろいでいる時、文化の束縛から解き放たれる。日本人に強迫観念がなければ、そして日本文化がしっかり見張り役をしていなければ、日本人は感嘆に低俗な人間に成り果ててしまうというものである。

Ⅲ-1-2 「日本人の性格構造とプロパガンダ」の誕生

ゴラーによる論文「日本人の性格構造」はもともと三章で構成された論文、「日本人の性格構造とプロパガンダ」として書かれていた。1は「日本人の性格形成」、2は「日本人を侵略戦争に駆り立てた理由」、そして3が「プロパガンダと日本人」であった。しかし、アメリカに保管されているゴラーの論文はすべて3章「プロパガンダと日本人」の部分が省略されており、目次が黒塗りにされたりし、完全版は存在しない。完全版はイギリス、サセックス大学のゴラー・コレクションにのみ存在する。内容が現実的とはみなされなかったのか、あるいは極秘扱いされたのかのいずれかであろう。では、3の「プロパガンダ」ではどのようなことが書いてあるのだろうか。ゴラーは日本人の性格構造に照らし合わせて、日本人に対して効果的であると思われるプロパガンダの方法のいくつかを提言している。

- ①軍事的な混乱を生み出すこと
- ②軍の間で「闘争心」を失わせ、市民の間で戦闘を支持する気持ちを減少させること
- ③国内的な分裂を起こすこと
- ④対戦国と軍事的に同盟関係にある国との間に分裂を起こすこと
- ⑤長期的な目的としては戦争後、大方の住民たちとの関係に従順さと協調性が得られること

まず、軍事的な混乱を生み出すこととして、ゴラーは日本人の心理を書く。「日本人は知ら

ないことや、いかんともしがたい状況に対して恐怖心をもつ。そして日本人がとる行動は、自分自身の行動をパターンし、他の人々の行動をパターン化されたものとして解釈するという際立った特徴を持つ。そのため日本人は「知らない環境への恐怖から、自分たちが接触する可能性のある人々や場所にかんするあらゆることを理解するため、努力を惜しまない」と推測できる。したがって「軍事上の混乱を引き起こすためもっとも可能な方法は、日本人が理解できる程度の複雑さであるべきで、一連のパターンが急激に変化するか、あるいは二つがお互いに相容れないパターンのいずれかをラジオを通して流すこと」をゴラーは提案する。

「戦闘の意欲」が低下することはあまり期待できないため、日本人に対する心理戦争の可能性としては、個々のリーダーたちに「侮辱」といった感情を植え付けることがもっとも期待できるものであろう、と書いている。ここで注目すべき発言は、アメリカが日本に対してとるべき姿勢である。ゴラーは、アメリカによる放送が、「立派な自信あふれた、優れた父親」の役割を演じきることである、と説く。ゴラーのこの識見は特に注目すべきことであり、彼は一貫してこのスタンスをとり続けた。

また、ゴラーはいかなることがあってもミカド自身を攻撃してはならないとし、ミカドを攻撃することは、中世のローマカトリックの法王を攻撃するのと同じである、と書く。日本における権力者側とは、天皇の名を利用し、天皇を辱めたり、天皇を裏切ったり、また自分たちの私利私欲を得るような人たちのことをいうのである、と述べている。

ゴラーは、もっとも見込みのある方法として、ある特定の権力をもつ人たちの評判を落とすことを提案する。彼は4つのグループをあげる。第一の不满グループとして取り上げたのが被差別部落の人たちであった。第二の不满グループとしては、リベラルな知識人をあげている。第三の不满グループは小作農民で、彼らはもっとも搾取されているグループである。そして第四のグループとして労働者グループをあげている。

西洋諸国に対するプロパガンダは、「脅迫」と「甘言」で成り立っている。たとえば、「降伏しなければ全国民は滅ぼされる」とか「降伏すれば、原料に自由にアクセスできる」などといった訴え方は、日本人には絶対にしてはならない。「私は議論しているのではない、私はあなたに命じているのだ」というのが、日本人の典型的な先生としての態度である。「これが文明化した人たちの行動方法である」、「これが近代的なやり方なのだ」と放送にあたる人たちは、大いなる確信をもって話し、哀れみといったものに訴えることは絶対に避けなければならない、とゴラーは注意を喚起するのである。

Ⅲ-I-3 「日本人の性格構造とプロパガンダ」の意義と影響

ゴラーが「日本人の性格構造とプロパガンダ」で書いた最終章「プロパガンダと日本人」は、敵国である日本に向けたプロパガンダに関する実験的な提案であった。日本の社会構造を研究し、その上で書かれた「プロパガンダ」は、日本における不満分子と思われる集団にター

ゲットをあてた戦略的な試みを述べた斬新で画期的なものであったといえよう。

『象徴天皇制の起源』のなかで加藤哲郎はドノヴァンを感動させたゴラーの「日本人の性格構造」と見出しをつけ、かなり詳細にその影響力について書いている。

……1942年4月20日づけで、情報調整局（COI）ドノヴァン長官は、部下である調査分析部（R & A）の文化人類学者グレゴリー・ベイトソンにも、感謝状を贈っている。それは、ベイトソンがイギリスの人類学者ジェフリー・ゴラーによる「日本人の性格構造」についての報告書をドノヴァンに届けたことへの礼状で、「これは実に面白く役に立つ研究だ。われわれの仕事に役立って嬉しい」と手放しで絶賛している。
(加藤：2005：142-143)

加藤は述べてはいないが、ベイトソンによってドノヴァンに届けられた論文「日本人の性格構造」は、3章「プロパガンダと日本人」を含むゴラーのオリジナル版であったことは間違いないだろう。なお付け加えておくと、グレゴリー・ベイトソンはマーガレット・ミードの夫であり、後に離婚することになるが、イギリス人であった。

さらにゴラー論文の評価についても加藤はダワーの著書を引用し、その重要性を強調している。

ジョン・ダワー『容赦なき戦争』第六章（平凡社ライブラリー、2001年）に詳しく紹介されているように、42年3月に学者仲間に配布され、ダワーが戦時米国における日本人論の「唯一最大の影響力ある学問的分析」と評した、センセーショナルな日本人論である。……日本には行ったこともない人類学者の戦争協力だったが、同業者ベイトソン、エンブリー、ベネディクトらに大きな影響を与え、戦時情報局（OWI）の対日ホワイト・プロパガンダのバイブルになった。
(加藤：2005：142-143)

情報調整局（COI）のウィリアム・J・ドノヴァン長官宛の手紙には、1942年5月2日にアメリカ政府・軍関係諸機関の対日新戦略を調整するための心理戦共同委員会（JPWC）が開かれたとある。その「日本計画」とは、連合国の軍事戦略を助けるための、帝国日本に対するプロパガンダであり、4つの政策目標を持っていた。その4つとは以下のものである。

- ①日本の軍事作戦を妨害し、日本軍の士気を傷つける
- ②日本の戦争努力を弱め、スローダウンさせる
- ③日本軍当局の信頼をおとしめ、打倒する
- ④日本とその同盟国及び中立国を分裂させる

これらの政策目標達成のために、八つの宣伝目的が設定されたが、それらは、この時点における米国の戦争目的と対日戦略を表わすものであった。

- ①日本人に、彼らの政府や日本国内のその他合法的情報源の公式の言明への不信を増大させること、
- ②日本と米国の間、戦争行動の文明的基準「civilized standards of war conduct」を保持すること、
- ③日本の民衆に、彼らの現在の政府は彼らの利益には役に立っていないと確信させ、普通の人々が、政府の敗北が彼ら自身の敗北であるとはみなさないようにすること、
- ④日本の指導者と民衆に、永続的勝利は達成できないこと、日本は他のアジア民衆の必要な援助を得ることも保持することもできないことを、確信させること、
- ⑤日本の諸階級・諸集団の亀裂を促すこと、
- ⑥内部の反逆、破壊活動、日本国内のマイノリティ集団による暴力事件・隠密事件への不安をかき立て、それによって、日本人のスパイ活動対策の負担を増大させること、
- ⑦日本とその枢軸国とを分裂させ、日本と中立諸国との間の困難を促進すること、
- ⑧日本の現在の経済的困難を利用し、戦争続行による日本経済の悪化を強調すること。

（加藤：2005：35-36）

加藤は影響があったのはゴラーの「日本人の性格構造」としか書いていない。それはゴラー「プロパガンダ」の部分は、今日アメリカでは入手できないため、ゴラーがプロパガンダについて書いていたことはほとんど知られていないと思われる。ゴラー論文の評価されるべき重要な点は、日本人の「性格構造」の分析部分はもちろんであるが、対日戦を目前にして書かれた、彼の「プロパガンダ」の部分を含むものであったと思われる。情報調整局によって書かれた初期の「日本計画」はまさにゴラーの指摘していた部分が反映されたものとなっているからである。穿った見方をすれば、ゴラー論文の3章「プロパガンダと日本人」はアメリカのプロパガンダの基礎的な資料として使用され、そのためアメリカでは消されてしまったのかもしれない。

なお、余談ではあるが、後日早稲田大学における「20世紀メディア研究会」で研究発表した折、光栄にも加藤哲郎先生の出席をたまわることができた。その時の懇談の折に、加藤先生も私と同様の考えを示され、「ゴラーはいうなら、因果を含められて3章の『プロパガンダと日本人』を削除したのではないか」という可能性を指摘されたことは、実に興味深いことであった。

私にとっては、ゴラー論文を追いかけて、アメリカそしてイギリスに数回にわたって調査したこと、そして日本研究者としてのゴラーの新たな側面を紹介できたこと、またゴラーの

論文は決して軽視されるべきではないということが、研究成果として示すことができ、また研究者のあいだでもその重要性が共有でき、うれしいかぎりであった。

そしてまた、アメリカによる占領政策は実に巧妙に行なわれたのである。アメリカ国内向けには、日本人が「非人間的」で、「猿」といった残虐さや非道さが強調されるという強烈なプロパガンダが流されたが、対日の心理作戦においてゴラー論文は学術的な参考として用いられ、あたかも「父親や兄のように」、実にソフトに訴えかける宣伝作戦がとられたのである。(土屋：2011：236)

Ⅲ-2 ゴラーの「日本文化におけるいくつかのテーマ」

ゴラーの二つ目の論文「日本文化におけるいくつかのテーマ」(Themes in Japanese Culture)は、1943年に書かれたものである。しかしこの書き方は論文というより、まるでどこかで講演しているようなスタイルがとられている。内容的にはゴラーの最初の論文「日本人の性格構造とプロパガンダ」を要約したものといえるものではあるが、「プロパガンダ」にかかわる部分は一切書かれていない。この論文は1966年に山本澄子によって「日本文化の主題」として翻訳され、近代日本の名著13のなかに収められている。(ゴラー：1966：63-85)しかし、ゴラーの日本人論について出版するにあたり、「日本文化におけるいくつかのテーマ」として新たに翻訳を行なった。

「日本人の性格構造とプロパガンダ」と比べて大きく異なるのは書き出しの部分にある。一見するとパラドキシカルにみえる日本人を非常に巧妙な書き出しで紹介し、そのパラドキシカルな部分を解明しようと試みたのがこの論文の大筋である。(Gorer：1943：1)

表面的には今日の日本は、私たちがこれまで記録をもっている文化のなかで、もっともパラドキシカルであるように思えます。どうして同じ文化が——しばしば同じ人たちが、一方では優雅さと穏やかさ、そして詩情に充ちた、微細な点まで注意を払った、高度に儀式化された、象徴的な茶道を尊び、取りおこない、そして他方では南京における略奪のような、ほとんど信じられないような残忍さや貪欲さ、そして破壊的な行為をすることができたのでしょうか。大勢の人が桜の花を愛でたり、蟬の鳴き声に耳を傾けたりすると同時に、他方では組織的、意識的に全住民たちを麻薬中毒におとしめるようなことができたのでしょうか。一方で、天皇も参加するような、真剣で、叙情的な歌会を催し、同時に自爆を進んで行なった——生きながら爆弾となった——三人の兵士のため神社を建てることなどできたのでしょうか。私たちが知るなかで、もっとも洗練された絵画芸術を発展させながら、しかもその多くがヨーロッパやアメリカではみたこともないような春画であるようなことが、どうしてあり得るのでしょ

ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、ヘレン・ミアーズの日本人論・日本文化論を総括する（福井）

うか。私たちの近代社会にあるようなもつとも洗練された複雑な社会制度を採り入れておきながら、政治や宗教、社会をごちゃまぜにしたような世界観——主要な発達した国家よりも、野蛮で孤立した未開の部族とおなじような世界観をもち続けることができるのでしょうか。

この前文は、ルース・ベネディクトの『菊と刀』の初めの部分を思い出させる書き方である。「菊」と「刀」という、相反する象徴的なものを用い、一見すると日本人をパラドキシカルにみせる点を説明したものである。

美を愛好し、俳優や芸術家を尊敬し、菊作りに秘術を尽す国民に関する本を書く時、
同じ国民が刀を崇拜し武士に最高の榮譽を帰する……（ベネディクト：1948）

この部分はベネディクトが日本人の行動をパラドキシカルに書いて強いインパクトを与えた1章の初めの部分であるが、この「菊」と「刀」に関する箇所はベネディクトが出版直前に書き加えた部分であることが調査の結果わかった。出版社の意向により、タイトルが『菊と刀』に決定されたことにより、ベネディクトは急遽「菊」と「刀」の部分を書き加え、日本人にみるパラドクスをより強烈に印象づけることとなった。しかし、ゴラーとベネディクトではその目的は異なっている。ゴラーが追求したのは、日本人をパラドキシカルにさせている所以であり、ベネディクトにとっては西洋人からみると日本人はパラドキシカルに見えるが、日本人の価値基準や倫理規範を知ることにより、それはパラドキシカルでもなんでもないということを説明するためであった。

ゴラーの「日本文化におけるいくつかのテーマ」は、彼が行なったりサーチをもとにした、あくまで方法論的実験であると断っている。方法論の原則となったものは、社会人類学、精神分析学、条件反射の心理学を用いて、そこから導き出された仮説をもとに、情報提供者を使って質問項目を作り、回答を求めたものをベースにしている。この論文では一切の章立ては行なわれていない。「日本人の性格構造とプロパガンダ」の部分のみを要約し、加筆、修正したのが「日本文化におけるいくつかのテーマ」であるが、初期の荒削りではあるが、ある種のエネルギーを感じさせるものとは趣きにおいて違いがみられる。

ゴラーについての研究を進める過程において、ゴラーの日本文化論が本当に調査検証し、本として出版する価値があるかどうか、出版社と議論があった。これまでゴラーが研究の対象となったことがなかったからかもしれない。またベネディクト研究者のある人は、ゴラーをそれほど高く評価しておらず、また当時ほとんどの学者が働いていた戦時情報局にも参加していなかったのではないかと、という疑問があった。そこで、そうした諸々の疑問に対して答える必要があったわけである。調査の結果、戦時情報局における日本文化研究をめぐるさまざま

な活動が明らかになった。

戦時情報局の文化研究に重きを置いた体制についてはI-1-2で詳細については述べたが、ゴラーと関連する部分に焦点を置いて簡単に書いておくことにする。ポール・ラインバーガーは情報局の最初のチーフであり、彼は心理戦のスペシャリストであった。戦時中の軍事作戦において彼が重要視したのは、文化を操作する以前に、文化を理解することの必要性であった。そして彼は、戦時情報局の極東部門の副長官としてジョージ・テイラーを新しく起用した。(Price : 2008 : 171-172)

ジェフリー・ゴラーはそのような折にテイラーのプロジェクトの一つに職を求めて面接にやってきた。しかし、面接の結果、ゴラーはテイラーのプロジェクトには採用されなかった。しかし、戦時情報局の他のプロジェクトには参画したようである。マーガレット・ミードによれば、戦略部門局 (Office of Strategic Service) の仕事に加わったとある。(Mead : 1959 : 352)

調査した結果を出版社の人たちに報告した。私の研究が不十分と判断されるなら、ゴラーの研究書はあきらめるしかない、心の準備はしていた。私が結論として報告したのは以下のようなことであった。

ゴラーが戦時情報局で働いていたことは事実であろう。しかし、テイラーのチームに加わり、テイラーのもとで日本研究に直接かかわることはなかったというのも事実である。しかし、重要なことは、ゴラーが記した日本人研究そのものであり、その理論的な部分がルース・ベネディクトの日本人研究に引き継がれたことである。(Price : 2008 : 172) ゴラーは短い期間ではあったが戦時情報局での勤務の後、ワシントンのイギリス大使館で働くことになった。1944年8月7日の雑誌『タイムス』によれば、「現在ワシントンでイギリス政府のための極秘研究を行っている」とある。イギリス大使館に勤務していた時に書かれた論文が“The Special Case of Japan”「極端な事例 日本」である。この論文はプリンストン大学のスクール・オブ・パブリック・アフェアーズ (School of Public Affairs) から出版されている学術誌パブリック・オピニオン・クォーターリー (The Public Opinion Quarterly) に1943年冬号に掲載されたものである。この論文でゴラーは「子どものしつけ」や「トイレット・トレーニング」には全く触れることなく、全編を通して書かれているのは、連合国として取るべき戦略、また決してやってはいけない行動や手をつけるべき日本社会の構造的な部分などを具体的に提案し、立案していることである。それはときには警告めいた口調で、ときには研究者らしい口調で学問的な説得をもって書かれている。イギリス人であるゴラーの、アメリカに対する挑戦といった気迫が感じられる論文である。その挑戦とは、「政策立案者は、異なる国の習慣や社会的な慣習を考慮に入れなければならない」ということが論文全面に貫かれている。

アメリカ人には異文化に対する経験が少ないことから、占領政策はイギリス人に任せるべきである、とゴラーは提言する。この論文がアメリカの学術誌、それも影響力が少なからずあったであろうプリンストン大学の学術誌に掲載されたことは、アメリカ政府やアメリカにおけ

る研究者に与えた衝撃も少なくなかったであろう。

ゴラーの3篇の論文について説明し、またゴラーのベネディクトへの影響、戦時情報局との関わりなどの説明は、出版社を納得させることとなった。このようにしてゴラーの日本研究に焦点を置いた書籍は誕生したのである。

Ⅳ ヘレン・ミアーズの日本人論

ヘレン・ミアーズに関する研究は、思わぬきっかけで始まった。ベネディクト研究に没頭していた頃、家族の者が思いがけない情報をもたらした。それはベネディクトが来日したことがあるという新聞記事であった。1992年12月24日の『日本経済新聞』の記事には次のようなことが書かれていた。1946年のある時、GHQの一行が比叡山にやってきた。そして訪問者は占領軍の日本調査の一行で、「資源の乏しい小さな国の小さな日本人が、なぜかくも戦争に強く、最後まで戦い抜くことができたのか、それを調べて歩いている」ということだった。あちこち回ったが、比叡山に来て初めて疑問が解けたと語ったそうである。その一行のなかにルース・ベネディクトがいた、というものであった。ベネディクトはもちろん来日経験はないのだが、色々調査していくうちに、このベネディクトに間違われた女性は、ヘレン・ミアーズではなかったのかと思い始めた。

ヘレン・ミアーズは戦前と戦後、合計して三度日本を訪れたことがあった。ミアーズは1900年にニューヨーク市で生まれ、1922年メリーランド州ボルチモア市のガウチャー・カレッジを卒業した。大学時代にはホッケーチームに所属し、また卒業写真に書かれた彼女のニックネームは‘Joke Editor’であった（資料提供：Sarah Ambrose）。在学中から、彼女は詩やエッセーなどを書いており、いつの日にか小説を書きたいと思うようになっていた。彼女の大学時代を含めて生活はかなり厳しいものであったようで、彼女はその生活ぶりについて次のように語っている。“All my activities since my college days have been focused around the two jobs of earning my living and learning how to write.” 彼女は卒業後、フリーのジャーナリストとなったのである。

彼女の友人の一人の家族が中国でミッシヨナリーをしていたこともあり、誘われて1925年中国に渡り、北京のユニオン医科大学で秘書として働き、一年ほど滞在した。その折に10日ほど観光のために日本に来たようである。そしてアメリカに帰る時には、シベリア鉄道、それも3等クラスで帰国した。

アジアへの2度目の旅行はそれから10年経った1935年のことであった。インドに行くつもりで発ったのだが、そこには行かず、短期間日本に来るつもりであったが、8ヶ月ほど滞在した。その時の経験をもとにして書かれたのが、*Year of the Wild Boar* (Lippincott, 1942) であった。1935年という年は干支で言う猪の年にあたるため、このタイトルにしたのである。この本は一般的な日本人の精神構造や考え方を知るための最適な入門書として様々な大学でも使用

され、プリンストン大学、ダートマス大学、スミス女子大学や中西部や西部の大学でも教材として用いられるところとなった。ミアーズはこの本を通して、一般の日本人が実際にどのような日々を過ごしているのかといったことを中心して書いており、いうならば個人的な記録のようなものであった。彼女の日本人を見る眼は決して自民族中心主義的なものではなかった。そのことはこの本の最後にも書かれている。

“There was always the danger of judging Japanese reactions from an American point of view, of assuming that because an American found certain habits of living uncomfortable, the Japanese must also find the uncomfortable; of assuming that because an American found certain customs and restrictions intolerable, they were intolerable also to the Japanese. I had by now learned this lesson — that the Japanese civilization was as satisfactory to the average Japanese as the American was satisfactory to the average American.”
(*Wild Boar*, p.338)

また同書のなかで彼女は「天皇はヒットラー、ムッソリーニとは全く異なることを強調するため、天皇は日本という国家家族の『優しい父親』として精神的に国家を統一する役目を担っているものであり、政治的にではないことを指摘するとともに、日本の政治・社会制度は自由主義とか民主主義に根ざしていないので、敗戦後過去の封建制度に逆戻りすると思われるが、国民はいつでも天皇には服従するから、連合国は天皇を利用するのがよい」と書いている。(近藤：1978：147)

1946年2月には連合国最高司令官総司令部（GHQ）の労働問題諮問委員の一人として来日し、日本での労働省婦人少年局の創設に力を注いだ。ミアーズは日本滞在中であった1946年8月には京都近辺のフィールドトリップ、そして同年5月には滋賀県を訪れ、紡績工場を視察しているのである。(GHQ/SCAP Records, ESS (B) 16666-16671)

1955年から1965年まで第三代婦人少年局長を務めた谷野せつは、その当時のことを1983年5月17日に開かれた『禅労働第七回婦人少年行政組合員全国集会における記念講演の記録』（1983年全労働省労働組合）のなかでミアーズとの思い出について語っている。

昭和21年4月10日に初めて婦人政権の行使が行なわれたのでございますが、……そのころは、アメリカから労働問題に関する諮問委員会の代表団がちょうど来ておられまして、私はその中の女性の委員であるミス・ミアスの視察のお供などをよく仰せつけられていたわけでございます。このミス・ミアスという方は、そのころアメリカで非常に売れっ子の政治経済の評論家でいらっしゃるわけでございますが、日本から帰られて何年かたった後、大変残念なことに、アメリカのアジアに対する占領政策

ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、ヘレン・ミアーズの日本人論・日本文化論を総括する（福井）

を批判したのがアメリカの国民の気にさわったのか、それ以来書くものが売れなくなり、不幸な状態でいらっしまいました。彼女は非常にアジアを愛し、占領政策を批判していたのでございますが、少し発言が早すぎたのか残念に思います。大変りっぱな方でした。（「婦人少年局・室の誕生の経緯とその任務」12 ページ）

谷野の話から推察して、ミアーズが比叡山を訪れていても決して不思議ではない。また彼女が話していた問題の書とは、1948年の『アメリカの鏡・日本』（*Mirror for Americans : Japan*）を指している。出版はしたものの、マッカーサーは日本での翻訳出版を許可せず、5年後の1953年ようやく『アメリカの反省』（文藝春秋社）として出版されることになった問題の書である。

ヘレン・ミアーズのコレクションはフィラデルフィアの名門校である Swarthmore College のピース・コレクションにある。2012年3月初めより2週間に亘って調査のため同校を訪れた。Swarthmore College は広大なキャンパスを持ち、素晴らしい大学であった。幸いにもゲストハウスに泊めていただいたのだが、19世紀のヴィクトリア朝時代後期の建築様式のハウスで、私たちが滞在したときは、3階建のハウスは全館暖房が行き届いており、快適な日々を過ごすことができた。

コレクションのキュレーターの女性はとても親切で、ミアーズの資料をピース・コレクションで預かることになった経緯や、ミアーズの資料の多くの部分が散逸してしまった顛末についても話してくれた。ミアーズは結婚した経験はあるが、長くは続かず3年ほどで離婚してしまったようだ。彼女は1989年に死亡するが、その後、遺品は遠い親族によって保管されたが、売却を望まれると売ってしまったりし、コレクションに残されたものは、これまで私が調査したなかで最も寂しいものであった。しかし、幸いコピーが許されたので、数百枚のコピーを持ち帰ることができた。なかでも最も興味あるもののひとつは、ミアーズが書いた *Mirror of America: Japan* に関して彼女が友人に宛てた手紙であった。1949年10月10日付の手紙であるが、ミアーズは次のようなことを書いている。（Helen Mears Collection 以下 HM とする HM 1）

Mirror of America : Japan はもうお読みにになりましたか。マッカーサーは日本からその本を締め出したのです。シングルスペースで4ページにも及ぶ書面でもって、それを個人的に禁止したんですよ。でも、スターズ&ストライプ誌のかつてのスタッフから聞いたのですが、占領に携わっている何人かの人たちはSCAPの禁止政策にもかかわらず、それに対して不満を抱き、脇にかかえてそれを持って行ったそうです。

この問題の本を書くまではフリーのジャーナリストとして『ハーパーズ』、『ニューヨーカー』、『ネイション』、『ニュー・リパブリック』などに頻繁に記事を書いており、1946年にはホートン・ミフリン賞を受賞するほどの売れっ子作家であったが、*Mirror of America : Japan* を出

した後は、どこからも声がかからなくなり、年老いた母親を抱え、大変苦しい生活を送ったようである。それでも、彼女は仕事を求め、ニューヨークに住み続け、伝を頼ってあちこちに手紙を出している。その時に彼女が自分自身を紹介するために用いていた文面は次のようなものである。

Have lived in both China and Japan ... have visited Japan three different times, Last time was in 1946 when I went as a member of a Labor Advisory Committee. Lectured on Japan for Army-sponsored Civil Affairs Training Schools at U. of Michigan, And Northwestern U. during war. Author : *Year of the Wild Boar*, and *Mirror for Americans Japan*.

ニューヨークで彼女は Hotel Latham に住んでいた。たった一部屋しかない安ホテルにほぼそと暮らしていた。3月の資料調査の折には、このホテルが今も存在しており、多くの長期滞在の外国人の人たちにとっての手軽なホテルであることを知り、また写真にも収めてきた。『アメリカの鏡：日本』のなかで彼女が書いたことは、「多くの犠牲者をだしてまで戦い抜いた『聖戦』およびこれに続く『日本再教育』としての占領について疑問を投げかけるものであった。したがって、一方で日本の侵略行為を断罪しつつも他方で欧米の帝国主義政策を批判するミアーズの視点は、ともすれば日本の犯罪を相対化し、さらには是認しているかのように受け取られたのである」(御厨：1995：63-76)。

『アメリカの鏡：日本』を著して以来、精神的にも金銭的にも苦しい生活を送っていたミアーズにとって唯一の救いとなったのは、1953年に Franklin Watts 社から出版することになったミアーズの最後の著書 *The First Book of Japan* であったことは間違いないだろう。彼女はこの本がベストセラーになるのではという期待さえ持っていた。この本はイラストも挿入されたもので、彼女の最初の本である *Year of the Wild Boar* を髣髴とさせるものである。ごく一般の日本人の家庭生活を通して垣間見ることができるのは、日本人の生活習慣をやさしい眼差しで書いていることである。

近年、ミアーズの問題の書は、さまざまな機会を得て注目を集めるようになっていく。とくに、ベネディクトの『菊と刀』(1946年)と出版年も近いこともあり、またベネディクトの書はGHQ推奨の書としてすぐに翻訳許可が下りたのに対して、ミアーズの書は日本にも持ち込むことも禁止されたという点から、しばしば比較されることがある。しかし、立場も異なり、バックグラウンドも違う二人を比較することに果たしてどんな意味があるのかと感じる。しかし、『菊と刀』と『アメリカの鏡：日本』はこの当時において実に対照的な本であったことは事実である。ベネディクトの人生は、この本の出版を機に大いに変化をし、その名声は今も衰えることはない。一方、ミアーズは『アメリカの鏡：日本』以降、ジャーナリストとしての生命

ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、ヘレン・ミアーズの日本人論・日本文化論を総括する（福井）

をも失いかねないものとなった。両者を比較してもさして得るものはないのではないかと思うが、両者の作品が与えた影響は、彼女たちの想像を超えるものであったことは間違いないだろう。これまで収集した資料の整理を含めていまま少しの時間をかけてまとめてみたい。それは今後の研究課題としたい。

大学時代のヘレン・ミアーズの写真をこの論文に掲載できるとは夢にも思わなかった。追跡して写真入手までこぎつけた福井ゼミの前野愛子の努力に賛辞を贈る。そして写真を提供してくださった Sarah Ambronse さんに感謝を申し上げる。

参考文献

- 加藤哲郎 2005年『象徴天皇制の起源』平凡社新書。
- ゴラー・ジェフリー 2011年『日本人の性格構造とプロパガンダ』福井七子訳・著、ミネルヴァ書房。
- 近藤淳子 1978年「天皇制機構温存過程考」『日本占領軍 その光と影・上巻』137-158頁、徳間書店。
- ハーイ・ピーター・B 1995年『帝国の銀幕——15年戦争と日本映画』名古屋大学出版会。
- ベイトソン・キャサリン 1993年『娘の眼から』佐藤良明、保坂嘉恵美訳、国文社。
- 土屋礼子 2011年12月10日『対日宣伝ビラが語る太平洋戦争』吉川弘文館。
- ミアーズ・ヘレン 1953年『アメリカの反省——アメリカ人の鑑としての日本』原 百代訳、文藝春秋社。
- ミアーズ・ヘレン 1995年『アメリカの鏡・日本』伊藤延司訳、メディア・ファクトリー。
- 御厨貴、小塩和人 1996年『忘れられた日米関係——ヘレン・ミアーズの問い』、筑摩書房。
- 『全労働第七回婦人少年行政組合全国集会における記念講演の記録』1983年「婦人少年局・室の誕生とその任務」
- Benedict, Ruth. Japanese Behavior Patterns. R ベネディクト『日本人の行動パターン』福井七子訳、NHK ブックス、1997年。
- Benedict, Ruth. 1974 (orig. 1946) *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Tokyo: Charles E. Tuttle Co. 長谷川松治訳『菊と刀——日本文化の型』社会思想社、1948年、1995年初版45刷。
- Caffrey, Margaret M. 1989. Ruth Benedict: Stranger in this Land. Austin: University of Texas Press. M・カフリー『さまよえる人 ルース・ベネディクト』福井七子、上田誉志美訳、関西出版部、1993年。
- Fukui, Nanako From 'Japanese Behavior Patters' to 'The Chrysanthemum and the Sword'『関西大学文学論集、文学部創設70周年記念特輯』（第44巻1-4号、555-580頁。
- Gorer, Geoffrey. 1935. *Africa Dances*. First published by Faber and Faber, 1935.
- Gorer, Geoffrey. 1942 Japanese Character Structure and Propaganda. Committee on Intercultural Relations.
- Gorer, Geoffrey. 1943 Themes in Japanese Culture, *The New York Academy of Sciences*, 5:106-124. Reprinted in Haring Douglas, ed., 1948 *Personal Character and Cultural Milieu*, pp.273-290, New York: Syracuse University Press.
- G・ゴラー「日本文化の主題」山本澄子訳『日本文化論』（近代日本の名著⑬）東京：徳間書店、1966年。

Gorer, Geoffrey. *The Special Case of Japan*, *The Public Opinion Quarterly*, School of Public Affairs Princeton University, 1943.

Gorer, Geoffrey. 1948 *The Americans—A Study in National Character*. G・ゴラー 『アメリカ人の性格』 星新蔵・志賀謙訳、1967年、東京：北星堂書店、1頁。

Gorer, Geoffrey. 1953 *The Life and Ideas of the Marquis De Sade*. Peter Owen Ltd. G・ゴラー 『マルキ・ド・サド—その生涯と思想』 大竹勝訳、東京：荒地出版社、1966年。

Gorer, Geoffrey. 1965 *Death, Grief and Mourning in Contemporary Britain*. London, Cresset Press. G・ゴラー 『死と悲しみの社会学』 宇都宮輝夫訳、1986年、東京：ヨルダン社。

Mead, Margaret, *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*, Boston: Houton Mifflin Company.

Mears, Helen. 1942 *Year of the Wild Boar: An American Woman in Japan*, J. B. Lippincott Company.

Mears, Helen. 1953 *The First Book of Japan*. Boston: D. C. Heath and Company, Copyright 1953 by Franklin Watts, Inc.

Mears, Helen. "Field Trip, Kyoto Area" April 9-22, 1946; "Factory Inspection Trip: Shikishima Boseki (Prinning and Weaving), Kusatsu, Shiga Ken," 10 May 1946; "Factory inspection Trip," April 1946, GHQ/SCAP Records ESS (B) 16666-16671.

Counterpunch, 6 August, 2004. (<http://w.w.counterpunch.com/price08062004.html>)

Price, David, 2008, *Anthropological Intelligence*, Duke University Press.

Time, August 7, 1944, Science Column.

RFB = Ruth Fulton Benedict Papers

1. Keene からベネディクトへの手紙、1947. 7. 8.
2. Greenslet からベネディクトへの手紙、1945. 11. 14.
3. ベネディクトから Greenslet への手紙、1945. 10. 22.
4. Greenslet からベネディクトへの手紙、1946. 4. 25.
5. Greenslet からベネディクトへの手紙、1946. 7.15.
6. ベネディクトから Gorer への手紙、1946. 10. 21.
7. Japanese Behavior Patterns
8. Provisional Analytical Summary of Institute of Pacific Relations Conference on Japanese Character Structure, December 16-17, 1944. Summary prepared by Margaret Mead.

GC = Gorer Collection

1. Japanese Character Structure and Propaganda
2. ゴラーからミードへの手紙、1941. 12. 31.
3. 1941年11月23日付けの *New Haven Register*.

HM = Helen Mears Collection

1. ミアーズから Mr. Lobrano への手紙、1949. 10. 10

ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、ヘレン・ミアーズの日本人論・日本文化論を総括する（福井）



1948年に61歳で死亡する直前の写真



若き日のジェフリー・ゴラー



ガウチャー・カレッジ時代の
ヘレン・ミアーズ



ジャーナリスト時代の
ヘレン・ミアーズ

ルース・ベネディクト、ジェフリー・ゴラー、ヘレン・ミアーズの日本人論・日本文化論を総括する（福井）



ピース・コレクションを所蔵するスワースモア・カレッジの図書館



ヘレン・ミアーズがニューヨーク時代に住んでいた LATHAM HOTEL